

民国期の歴史教科書におけるナショナル・アイデンティティの方向性 ——中等学校「中国史」教科書における総論部の分析——

鈴木 正弘

はじめに

近代歴史教科書は、学校教育を通じて、ナショナル・アイデンティティの形成、国民の形成に寄与した。筆者は中国における専制国家から国民国家への移行期にあたる清末民初における歴史教科書の動向を、ナショナル・アイデンティティの形成過程に着目して検討した¹。民国期を通観する研究はこれからの課題と考える。この時期の中等学校用教科書は総論と編輯大意とを附しており、これらの記述に着目して、歴史教科書のナショナル・アイデンティティの方向性を検討する。ここでは、

- [1] 趙玉森編『共和国教科書本国史』（商務印書館、1913）
- [2] 顧頡剛・王鍾麒編『現代教科書 初中本国史』（商務印書館、1924）
- [3] 国立編訳館編『初級中学 歴史（修訂版）』（国定中小学教科書七家聯合供応処、1947）

の3種の審定教科書を検討する。各書の総論部分の構成をみると、[1]書の「通論」の構成は、「疆域」「種族」「歴代沿革」よりなり、各篇に「上古期」「中古期」「近古期」「近世期」「現代期」の概説を附している。[2]書は「一．歴史と地理」「二．歴史進化の各方面」「三．中国歴史を構成する諸民族」「四．史期の区分」について論じている。[3]書の「概説」は「第一課．中国歴代の興衰の大要」「第二課．中国歴代の文化進化の趨勢」「第三課．中国歴代疆域の沿革」「第四課．中国歴代の政治区域の変遷」「第五課．中華民族の起源」「第六課．中華民族の形成」の6課よりなる。新しい教科書ほど、理論的に詳述するが、大きくみれば、民族・文化・領土・時代区分と各時代の概観よりなっている。

拙論では、各書の全体的特徴と民族に関する叙述に留意しつつ、通史叙述の要点を

1 筆者は2007年に「清末民初におけるナショナル・アイデンティティの動向——歴史教科書の記述内容の考察——Ⅰ」（アジア教育史学会、於明治大学、2007.7.29）「同Ⅱ」（教育史学会、於四国学院大学、2007.9.22）「同Ⅲ」（日本社会科教育学会、於埼玉大学、2007.10.7）「同Ⅳ」（中国四国教育学会、於広島大学、2007.11.24）の諸発表を行い、その他に執筆・発表した諸稿とともに「清末民初におけるナショナル・アイデンティティの形成——中国歴史教科書形成史の研究Ⅰ——」を執筆した。本稿はその一部をなすものである。

検討し、①世界に対する認識、②漢族の淵源に対する認識、③文化に対する認識、④「中華民族」ならびに漢族と非漢族の関係に対する認識、を分析の枠組みとして設定し、ナショナル・アイデンティティの動向を考察する²。

I. 民国初期の中等学校用歴史教科書総論部の特徴

——趙玉森編『共和国教科書 本国史』（商務印書館、1913）の分析——

民国初期の歴史教育は、清末の潮流の延長線上にあり、明治後期の日本の歴史教育に示唆を受け模索したもので、同心円の歴史教育構想と称すべきものである³。趙玉森編『中学校用共和国教科書 本国史』（商務印書館、1913）はこの時期の教科書を代表するものと考えることができる⁴。

1. 本書の概要

本書は民初の中学校用の審定教科書であり、教育部の審定に際しての「批語」は、

この書の取材編次は、尚合宜に属し、叙事もまた簡潔にして要を得たり。その概説中に歴述せるは吾国の偉大な民族の、漸次融化せる時期、国民をして五族共和に曉然せしめ、実に自然の趨勢有り、尤も史眼の独り具うを為さしむ。

とあり、五族共和論を基礎に民族の融合する経緯を概説した書と位置付けている。「編輯大意」は留意点として、

- | | |
|--------------------|----------------|
| (1) 中学校施行規則の要旨に従う。 | (5) 近現代史の重視。 |
| (2) 週毎に時数、学年配当。 | (6) 歴史と地理の関連性。 |
| (3) 叙述内容の特徴。 | (7) 民国紀元の使用。 |
| (4) 時期区分の留意事項。 | |

2 筆者は清末民初教科書を分析する枠組みとして①諸外国との接触にともなう「中国」の自覚、②多民族国家・領域国家と整合する漢族のあり方、③国民国家の指向にともなう「民」の重視、③中国文化の意義付け、の四つの枠組みを設定した。この設定の内、①③は民国期になると、明確となり、分析の枠組みとして有効ではない。したがって、拙論では新たな枠組みを設定することとした。

3 拙稿「五四運動にともなう歴史教科書構想の革新——歴史科「課程綱要」の考察——」（未発表）参照。

4 筆者の閲覧した書は京都大学文学部架蔵書である。「鈴木豹軒先生手澤」の印があり、鈴木虎雄の旧蔵書である。本書の書誌事項を確認すると「編纂者：丹徒 趙玉森／校訂者：寧郷 傅運林、武進 蔣維喬／発行者 商務印書館」であり、上巻は「中華民國2年7月28日初版発行／中華民國3年2月8日訂正3版発行／中華民國4年9月20日訂正8版発行」であり、下巻は「中華民國2年9月初版／中華民國2年11月訂正再版／中華民國3年6月訂正4版」である。

の7項目を掲げる。この内やや留意すべきは、(3)において「本編は既に政治史・文化史の性質を含有し、採る所の史料は、務めて過去・未来と重要な関係を有す」と述べ、本書の政治史と文化史の両要素を兼備し、加えて未来と結びつけて過去を捉えようとしている点である。ナショナル・アイデンティティの観点からみて、どのように文化を描き、未来の課題から過去をどのように描くかは極めて興味ある課題である。また(4)において、本書の時代区分が東洋史・西洋史の時代区分を勘案して策定されている点は興味深い。つまり本書は国史体の教科書でありながら、東洋史・西洋史との接合を念頭に置いて執筆されているのであり、内容的にも一定の配慮がなされていると考えられる。また(5)の近現代史重視、共和国建国の重視、(7)の民国紀元の採用、列国表及び統系表を掲載することなどは、確認しておくべき事項である。

2. 民族に関する記述の特徴

まず中国について、「中国は世界最古且つ大なる国」(第三章 歴代沿革)であるとし、歴史を誇る大国として位置付ける。そして、

中国人種は、歴史を有してより以来、即ち種々の関係及び種々の組織を以て、聯合して一偉大な国民の団体を為し、その小別に就てこれを言わば、共に六種を計る。(第二章 種族)

と述べ、中国を民族の面から、「中国人種」を構成する6種族の連合する国民の団体とみなす。ここでいう「人種」は今日の生物学的分類というのではなく、文化的・政治的な民族の概念に近いもので、いわゆる「中華民族」に近いものとみなすことができる。この「中国人種」を構成する6種族とは、漢種・蒙古種・唐胡種(ツングース)・突厥種(トルコ)・唐古特種(タングート:チベット)・苗種である。そして、

一は漢種と曰う。…(略)…代々中国文化の中枢を握る。(第二章 種族)

と述べ、中国を文化的複合体として捉え、その文化の中枢を握る存在として漢族を位置づける。漢族については

その先は西方より来り、黄河流域に沿い、漸次四方に蕃殖し、これを吸収するの種族は最も夥しきを為す。(第二章 種族)

と述べ、西來說によりつつ、諸種族を吸収して拡大した民族であるとする。他の民族に関する記述をみると、蒙古種については「勇を好み戦を善くする」とあり、唐胡種(ツングース)について「遼・金・清の三朝は、自ら興す所なり」とあり、突厥種(ト

ルコ)について「漢種と交渉最も多きを為す」とあり、唐古特種(タングート:チベット)については「青海・西藏、及び四川・雲南の辺地に蕃衍」す、とあり、苗種について「相い伝うに中土の土人為りて、後多く漢種に合す。その未だ同化せざる者は、今多く川・滇・桂の辺徼の地方に雑居す」とある。漢族の居住地である中国本部からみて、周辺の「辺地」「辺徼」、さらに遠方の諸民族も漢族と密接な交流を有し、歴史を共有する存在と位置付けている。そして民国の現状と展望を

民国肇めて興り、有する所の城内の人民は一切平等、種族・階級・宗教の区別無く、今に継ぎ以て往くに、畛域^あ胥い融け、国民の能力を同じくし、以てその偉大の団体を鞏固にするは、則ち我が同胞公共の天職なり。

と述べ、民族・階級・宗教の別によらない人民間の平等と、多民族国家としての中国を強固にする目標とを明示する。

3. 各時期の叙述の特徴

各時代ごとの「概説」部分を通観して、本書の叙述の特徴を検討しよう。各時代ごとにまとめると大凡以下ようになる。

〔上古史〕(～東晋末):

「吾が国偉大民族を鑄成せるの最要の時期」とし、黄帝以前と以後とに分け、黄帝以前を「吾が国民族の西方より移殖を為すの時代」黄帝以後を「吾国民族の各族を融化せるを為すの時代」として、漢族西來說に基づいて立論する。そして、

我が国の西方より移殖せるは、当に数千年以上にして、既已に西方固有の文化を挾み亜東各民族に与えて相い融合し、而して巍然と東方歴史界の主人翁と為り、
…(略)…(第四篇 近古史 第六章 近古期概説)

と述べ、西方の文化をもたらして東方の歴史の主役になったとする漢族西來說によっている。黄帝以後の各族の融合過程を以下の4期に区分する。第一期は洪水を契機としてそれ以前の停滞を脱して民族発達の第一歩をなした。第二期は春秋戦国時代の競争によって「夷戎狄」は各々その東西南北の強大国の吸収され、互いに通婚し、互に文明を採り入れて新しい社会を組織し、「凡て神州に在るの民族は、一族に非ざるは罔」い状況になったとする。第三期は漢と匈奴との交戦期であり、結果として「匈奴族民は、乃ち漸次^{よろこ}款びて服し、漸次吾が族文明の空気を吸い、而して同化の効果を収めたとする。第四期は、五胡の時代であり、破壊もあったが「精神上」においては、

文化の刺激を受け、互いに補完して、一体化したとする。全体としてはみれば、この時期は常に漢族の「主動の地位」にある時代で、「漢族の単独に能力を発展せる期」であるとする。

〔中古史〕（南北朝～元末）：

「天は蒸民各各を平等に生む」という各族平等の観点から、この期は全体として「我が国の各民族の能力を発展せる期」であるとする。上古のように期を分かっているわけではないが、便宜的に分けて整理することとする。第一期は南北朝で、東胡の遺裔である北朝は、「漢族固有の文明」を吸収して混合したとし、南朝と並置して「漢族と東胡族の同時に能力を発展せる時代」とする。第二期は隋唐で「北朝の混合する所の者」をさらに混合したとして、「漢族の能力を発展せるの時代」とする。第三期は五代で、「漢族と突厥族と更迭して能力を発展せるの時代」とする⁵。第四期は宋で、「唐古特族・蒙古族、（漢族と：鈴木補）同時に能力を発展せるの時代」とする。第五期は元で、「蒙古族の能力を発展せるの時代」とする。こうした民族興亡史観は、桑原隲蔵の東洋史教科書の流れを汲むものとみられる。こうした諸民族興亡を総括して、

これを総ぶるに何族たるかを論ずる無く、其の能力は一度の発展を経れば則ちその特長の性質、優美の習尚は、以て種種有益に及び、通国の機能は、必ず時に随い全国の社会に散布し、而して純然に全国の偉大な民族を結合せるの作用を為し、純然に全国の偉大民族の進化の作用を為す。

と述べ、全国の諸民族を結合させ、進化させたものとして積極的な評価を与えている。

〔近古史〕（明）：

これ以前の中国文化の力量を、東方・周辺諸国には大きな影響を与えたが、世界の「一隅」にあるために文化の進歩は充分でなかったとする停滞論的認識に基づき、この時期を「多民族の文化」を合わせることを「世界進化の公例」として、「我が国の民族と世界の各民族との交通の原始期」と位置付ける。モンゴルの遠征は戦史上は栄光あるできごとであるが、文化史上は同化を妨げたとし、明の平和的交流を高く評価して、

ここにおいてアダムの子孫と炎黃の裔胄とは、従容として世界の舞台の上に握手し、而して感情は日々^{あまね}洽く、阻礙は日々消え、伝教・通商・文明は互換し、遂に近日の五洲の通互に棟ぶを開くは、古え未だ有らざるの創局なり。

5 ここで突厥族といっているのは契丹を指すものと思われる。契丹は今日普通には、モンゴル系とツングース系の混血したものと考えられている。

と述べ、白色人種との文化的な接触の画期として位置付け、さらに「大同の盛域に^{のぼ}躋るべきなり」として、大同思想に基づいて世界の平和的交流の萌芽として論及する。また「炎黃の裔胄」を「アダムの子孫」と対置することは、西洋史に対置する「中国史」を構想する萌芽とみなすことができる。

〔近世史〕（清）：

「我が国民族の世界各民族の文化を吸受して進化を実行する期」とする。明末の西欧諸国の来華を旧来の「賈胡番客」と同一視していた状況を指摘し、清代のネルチンスク条約の締結を契機として、「国際団」すなわち国際社会との接触の始まりとする。こうしたなかでアメリカ独立、フランス革命の影響を受け、清朝の専制支配を打破して「亜洲唯一の共和国」を建国し、「国民の治本期」に至ったとする。そして「世界各民族の文化」を感受して、「萬邦一体の幸福」すなわち世界の平和的繁栄を求めている。

〔現代史〕（民国）：

実際の歴史というよりも、現代の課題を示している。「吾が国の民族は根本上の聯合を実行し、一致して世界各民族との競化を進行するを為す期」であるとし、民族の根本的連合と世界の各民族との競争という二つの課題を示している。まず民族の根本的連合については、「各大民族融合の淵源」については不明確な点があるとしつつ、清代の民族区分や形式上の連合を否定して「精神上の聯合」を目指すとし、

吾れ五大族の名称を知り、必ず淘汰に帰し、而して完全の中国に合して一大民族と為さん。

と述べ、最終的に一つの大民族となることを目指すとする。競争しなければ生存の脅かされるは世界情勢であり、「我が国国民の憂患を為すの開始期」であり、国内各民族の一致した行動によって乗り越えようとするのであり、「務めて五色旗をして、永く威を大地に播声すべき」であると結んでいる。



本書は五族共和の視点から、「中国人種」を6種族の連合体とし、「炎黃の裔胄」として「アダムの子孫」である西洋の人々と対置する。漢族については中国文化の中樞を握る存在と位置付け、西來說によりつつ、諸種族を吸収した民族とする。叙述においては、民族の融合と対外関係を大きなテーマとして設定している。漢族西來說を基盤とし、漢族を多様な民族を取り込み、多様な文化を採り入れた存在としていること、遼・金・元等のいわゆる征服王朝に対しても、「平等」の視点から諸民族の結合のために積極的評価を与え、最終的に一つの大民族となることを目指すとしている。

Ⅱ. 壬戌学制後の中等学校用歴史教科書総論部の特徴 ——顧頡剛・王鍾麒『現代教科書 初中本国史』（商務印書館、1924）の分析——

1922年のいわゆる「壬戌学制」は、袁世凱政權の崩壊後、五四運動をへて大きく変化し、デューイ（Dewey, J.）の教育思想を根幹としつつ、デモクラシーとサイエンスを標榜し、アメリカの六・三制をモデルとした学制改革案を提唱した。この学制改革にともなう教育課程の改訂をうけて、翌1923年には小学校・中等学校における各「課程綱要」の公布をみることとなる。この一連の「課程綱要」歴史科の大きな特色は、小学校低学年における社会科の導入と共に、中等学校における世界主義（コスモポリタニズム）に基づく「世界史」あるいは「世界文化史」の導入であった。この世界主義（コスモポリタニズム）の志向は強固な反対論を引き起こす⁶。しかし「課程綱要」の趣旨を汲んで、「世界史」を書名に掲げる教科書が刊行されることは歴史教育史上特筆すべきことである。ここで取り上げる『現代教科書 初中本国史』（以下、『本国史』と略称す）⁷は、こうした「世界史」の志向を受けて編纂された国史教科書である。

1. 本書の概要

『本国史』は『現代教科書 初中世界史』と対をなす教科書であり、編輯者は顧頡剛・王鍾麒、校訂者は胡適である。編輯者の王鍾麒（1890-1975）は1923年の初頭に商務印書館の編訳所に招聘され任に当たった。また顧頡剛（1893-1980）は1920年に北京大学を卒業したばかりの新進気鋭で、後に古代史の大家となる。校訂者の胡適（1892-1962）は、アメリカ留学生であり、白話運動の推進者として高名である。胡適の中国史に対する態度を見ると、彼は留学の要件として、国学・文学・史学の基礎教養の必要なことを指摘している⁸。その中で史学について「須く吾が国の全史に通曉すべし（一種の教科書を指定すれば、夏穂卿『中国歴史』の類の如し）」（「非留学論」

6 この時期の国家主義（ネイショニズム）と世界主義（コスモポリタニズム）の相剋の様相については、何成剛「国家主義与世界主義」（『中学歴史教学参考』2004-10）参照。筆者は「中国における民国期歴史教育史研究の動向——何成剛「国家主義与世界主義」の紹介を中心に——（歴史教育史研究会定例研究会、於豊島区立勤労福祉会館、2008.9.19）として、全文翻訳の上口頭報告した。

7 上冊1923.9初版（実藤文庫架蔵書は1925.10四版）中冊1924.2初版（実藤文庫架蔵書は1924.6再版）下冊1924.6初版（実藤文庫架蔵書は1925.5再版）。

8 この内「国学」では、「須く『四書』『書経』『詩経』『左伝』『史記』『漢書』に通曉すべし…（略）…」とあり、また「文学」では、「…（略）…その能く『説文』とその『史』『漢』の文及び唐詩宋詞に通じる」とあり、伝統的な経史文一体の教育、家塾・書院教育の流れを尊重していることが理解できる。この三教科を挙げる「理由」を「上列の三門は、初め苛求を為さざるなり。国文は、所以に他日文明の利器を紹介するなり。経籍・文学は吾が国古文明の一斑を知らしめるなり。史学は、祖国歴史の栄光を知らしめるなり。皆所以にその愛国の心を興起せるなり。…（略）…」と述べ、留学生たるべき基本は、「愛国心」であるとし、さらにこれらは中学以上の備えるべき知識であるとする。

『留美学生年報』第3年、1914.1 原載⁹)と、夏穂卿すなわち夏曾佑の教科書を推薦している。夏曾佑『中国歴史』とは『中国歴史教科書』のことで、中国における史学教育の伝統的を踏まえながら、新しい要素を加味した教科書である¹⁰。胡適の研究は、中国の伝統に深く根ざしたものであり、単にアメリカの影響を受容したというのではない。

「編輯大意」は留意点として、

- (1)本書の基本構成。
- (2)王朝断代によらない。
- (3)「時代の精神」を主眼とする。
- (4)公元紀年を用い、当時当地の年号を附す。
- (5)教授に際して想像を喚起する。

の五点を掲げる。やや留意を要するのは、(3)において、「時代の精神」に論及していることであり、具体的には「民族の分合、政治の組織、社会の気風、学術の変遷の如きは、すべて当時の特徴を表現するに足り、影響は後世の歴史に及ぶ」とし、こうした事項を系統的に紹介するとする。ついで(4)において「帝王の世系表」を附さない原則を示しているのは、正統観念の打破を標榜すると共に、旧来の支配者中心の歴史叙述を改める上でも意義がある。その他に(3)において、必要に応じて註を附すこと、(4)においては西暦を用い「当時当地の年号」を併用すること、(5)においては人物の呼称を当時の職位に基づいて記し、当時の地名で見慣れないものには註を附す、等の点は留意する必要がある。

この時期の歴史教育の構想は、「世界史」構想を基本としている。したがって「中国史」も「世界史」との関係を意識しつつ構想されており、歴史と地理の関係を理解する必要より、「世界通史中に一部分の研究を括り出し」て「国別史」とする必要性を導き出し、

国別史の責任は、惟その一国を基礎とする社会活動を究明するにあるのみであり、それ故、本国史の内容は当然本国を基礎に発生したすべての社会活動を主体となしたものである。(一 歴史と地理)

9 『胡適學術文集 教育』姜義華主編、中華書局、1998、再録による。

10 本書は光緒30年(1904)に上海の商務印書館より出版され、再版を重ねて民国22年(1933)には、商務印書館より『中国古代史』と改題されて「大学叢書」に収められている。改題書名よりわかることであるが、本書は中国の古代史に関する通史書であり、扱う時代は秦代までであり、決して完備した教科書ではない。しかし本書は、中国人の手によって著述されて、当時大きな影響を与えた新形式の教科書であり、加えて後世まで影響の大きかった書なのである。なお夏曾佑の『中国歴史教科書』については、拙稿「清末における『中国史』の構想」(未発表)参照。

と述べ、「国別史」の責任を「社会活動を究明」するにあるとする。そして、

私たちの本国史を研究する時には、域外の情形に対して、上古・中古・近古・近世或は現代であるとを問わず、凡て本国と関係を有すものは、概括して特にその事類を説明し、次いでその本末を掛けて、少なくともどうして本国と関係を生ずるかの要点を究明しなければならない。(一 歴史と地理)

と述べ、時代を問わず、域外との関係に留意するとしている。具体的には、

1. 中華民族はどのように組み合わさったものであるか。
2. 中国の文化は外縁の影響をどのように受けてきたか。
3. 中国勢力の影響は域外に到り、どのような変化を起したか。
4. 中国現有の領域は、どのように変化して成立したか。

という、四つの課題を掲げている。このなかで、文化面の外的影響、交流の重視を指摘している点は、本書の文化理解として注目すべき点である。

2. 民族に関する記述の特徴

上述のように本書は、中華民族の生成過程を一つの課題としている。その際に中華民族を構成する諸民族をどのようにみているであろうか。本書では、

中国歴史を構成する民族は華・苗・東胡・蒙古・突厥・蔵・韓七族である。七族の中、華族は主要な分子である。(三 中国歴史を構成する諸民族)

と述べ、漢族を「華族」と称し、「韓族」を加えている点に特色を認めることができる。

本書はダーウィンの進化論を肯定する。したがって『聖書』の創世神話や中国の盤古神話などを否定する。こうした人類の発生に関する見直しは、「華族」の由来について、東來說と西來說の二説のあることを紹介し、

上述の両説を総合してみると、みな牽強附会たるを免れない。東來說は取材を信頼するにたらない讖緯伝説に採り、更によるべきではない。西來說は比較的情に近いものであるが、しかしまた必ずしも確かめることはできない。私たちは、中国の民族は確かに許多的変化を経過し、外来の影響を確かにたいへん多く受けたものであると認めるだけにすぎない。

と述べ、東來說を明確に否定し、西來說についても懐疑を表明する。そして他の六族についても始原はわからないとする。七族の特記すべき点を掲げると、①華族：「漢

族」と称されており、文化上深い淵源を有して、異民族の征服にあいながらも征服者を同化したとし、

今日のいわゆる華族は、ただの一つの大きな共通の名であり、内側には無数の歴史上の同化を被った民族を包含している。

とし、「華族」を多民族を包含する名称とする。②苗族：華族と同化の傾向になる。③東胡族：一部を除き同化の傾向にある。④蒙古族：蒙古を拠点とし、新疆・青海の一帯に居住。ブハラなどの汗国はロシア人の保護下にあり有名無実となっている。⑤突厥族：トルコであり、陝西・甘肅にも多く居住している。⑥藏族：蔵・苗「同山一源」説を紹介する。⑦韓族：「今の朝鮮」であるといい¹¹、韓族を加えるのは、華族を多民族を包含する名称とすることに由来し、

古より以来、中国と関係は最も密にして、まるで中国文化の外府である。ゆえに現在は日本に併せらると雖も、然して彼らの中国に來りて帰化を申請するものはかえって極めて多い。

と述べ、帰化を申請する者の多いことを理由として挙げている。

3. 各時期の叙述の特徴

本書は、断代史を否定して、

- | | |
|--------------------|-------------|
| A. 上古—秦以前。 | D. 近世—清朝。 |
| B. 中古—秦初より五代の末に到る。 | E. 現代—中華民國。 |
| C. 近古—宋初より明末に到る。 | |

の五期に区分している。この区分のBとCとの画期は、日本における唐宋の画期と符合している。各時代ごとの特徴を簡略に述べており、整理して本書の叙述の特徴を検討しよう。各時代ごとにまとめると大凡以下ようになる。

〔太古期〕：

伝説を神話として否定。「無史時代」とする。

11 「上古の嵎夷、周時の濊人、漢時の三韓——馬韓・辰韓・弁韓——沃沮、晋時の休忍、唐時の耽羅、五代の高麗、宋時の定安、明・清時代の朝鮮」は彼らの名称の沿革であるとし、この中に、高句麗と新羅の無いのはやや気になる点である。ただし三韓があれば、新羅も当然含まれようし、高麗があれば高句麗が含まれてもよいものと思われる。

〔上古期〕（秦以前）：

政権の集中と民間思想の発達を特徴とし、「域内文明の成人時代」とみなす。

〔中古期〕（秦～五代）：

政治面では皇帝政治の時期で、「五胡乱華と外教の伝入」を重要な出来事とし、中国民族の文化は、漢・魏にいたって活力を失い、「多くの民族上と精神上的の新血を吸収し、しだいに新たに若返」って、唐朝の繁栄を築いたとする。これは精神的「吸血」による若返りによって「保養の功」を説明するものである¹²。

〔近古期〕（宋～明）：

政治上は従前のままで変化無く、「異族」である遼・金・元の侵入と中国近世文明の進化を重要な出来事とし、蒙古民族の支配の後、「中国民族の革命軍」が起こり、中国民族の帝国である明朝を建てたとし、「中国民族の生存競争時代」とする。

〔近世期〕（清）：

外来の「異族」である清は、「外族」に対して「懷柔の政策を採用し、故意に寛大さを示」し、西洋勢力に対しても門戸を開き、物質文明と学術思想が流入し、「中国の事物」も交通によって域外に伝わり、僑民も増加したとし、「東西文明の接近時代」とみなす。

〔現代期〕（民国）：

共和国となり、帝政運動などの「民治の潮流に逆らう」ものは失敗に帰し、民間の「世界に対する観念」も明瞭となり、政治問題や社会問題に対して「羣衆運動」が起こり、「民治精神」が現れた。学術思想も「世界化」し、「中国文明の世界化の時代」とみなす。



本書は、世界主義（コスモポリタニズム）を基礎とする世界史的把握を基礎としつつ、中国民族の生成過程を一つの課題としている。その際に漢族の語を用いずに「華族」の語を用いて、多民族を包含する存在と位置付け、帰化申請者の多い韓族を旧来の6族に加えている。漢族の淵源については、ダーウィンの進化論の基づいて神話を否定し、その延長線上に、漢族西來說に対する疑念を表明する。文化については「世界史」との関連を視野に置きつつ、他地域との交流を重視している。

Ⅲ. 民国末の中等学校用歴史教科書総論部の特徴

——国立編訳館編『初級中学 歴史（修訂版）』（国定中小学教科書七家聯合供応処、1947）の分析——

広東国民政府・南京国民政府期の歴史教科書に対する政策等については、筆者にと

12 「保養の功」については、拙稿「『国民』教育構想に基づく歴史教科書の模索」（未発表）参照。

ってこれからの研究課題である。外に日本の圧力、内に共産党の活動を抱え、37年より日中戦争に突入し重慶へ遷都しつつ戦わねばならなかった。終戦後の45年より国共内戦に突入し、49年には、蒋介石は台湾に逃れることとなる。従って本書は、民国期の最末期に刊行された教科書であり、戦争による多難な時期に編纂された戦時期のナショナル・アイデンティティの志向を示す教科書である。

1. 本書の概要

外表紙には「教育部審定」「初級中学 歴史（修訂版）第一冊」「国立編訳館編」とあり、内表紙には「国定中小学教科書七家聯合供給処印行」とある¹³。本書は国定教科書に類する性格を有す教育部審定教科書ということができる。奥付には「中華民國三十六年一月上海白報紙修訂本第十八版」とあり、本書は1947年に刊行されている。1947年1月といえば、第二次世界大戦はすでに終結して、国共内戦をへて中華人民共和国樹立の直前の時期であり、国民党政府の優勢であった最期の時期ということになる。主編者は「国立編訳館」で、編輯者は聶家裕、校訂者は方豪・金兆梓・鄧広銘・鄭鶴声・黎東方・藍文徴・顧頡剛の諸氏である。この関係者の詳細を今明らかにすることはできないが、顧頡剛の名の見えるのは教科書編纂の継承されていることの一端を示している¹⁴。

本書は比較的詳細な「編輯経過」を付している。それによれば、1934年度に教科用書編輯委員会を組織し、中・小学教科用書の編輯を開始した。34年といえば、満州国の建国した年である。1938年には、「抗戦建国綱領」が頒布され教材の改編にも及んだという。この38年といえば、第2次国共合作、南京陥落、武漢陥落の多難な時期である。こうして委員会の人員と組織を改め、張道藩・許心武を主任委員とし、梁実秋・李清悚を中・小学教科書編輯組主任として本書の編纂に取り組むこととなる。本書は基本的に1940年に教育部の頒布した「修訂初級中学課程標準」によるとして、「編輯要旨」は留意点として、

- | | |
|----------------------|---------------------|
| (1) 1940年の「課程標準」による。 | (6) 紀年、地名表記の方法。 |
| (2) 5分冊で5学期で学習する。 | (7) 図表の扱い。 |
| (3) 「民族主義」による。 | (8) 注釈について。 |
| (4) 取材の基本的な視角。 | (9) 教師用の「教学輔導書」の存在。 |
| (5) 立論の基本方針。 | (10) 1・2年以内に修訂すること。 |

13 筆者の閲覧したのは、東北師範大学教育学院架蔵書である。

14 それまでの教科書出版の一つの中心であった上海商務印書館は、1937年の第二次上海事変によって壊滅的な打撃を受けており、こうした状況に対処するための措置と見られる。なお詳細は一層の検討が必要である。

の10項目を掲げる。この内やや留意すべきは、(3)で、

本書の内容は、総裁訓示を遵照せるに係り、民族主義を以て中心と為し、特別に
国史上の光栄事迹を説明し、以て学生の愛国心を激発せしめ、並びにその堅強な
民族意識と自強不息の革命精神とを養成せしむ。

と述べ、「総裁訓示」によりつつ、戦時下の難局に対峙しようとするもので、「民族主義」を中心に、「愛国心」を高めることを志向している。(4)では、政治・社会・経済・文化と学術の四方面について述べており、政治・社会については現在生活との関係、経済については国家財政との関係、文化と学術については、「固有文化の一貫性」や「中外文化の交換」について論及している。こうした指摘は、直面する戦時体制において、より強固な愛国心を育成しようとする観点によるものとみることができる。また(5)では「伝統の歴史観念」によるとしている点も本書の性格として留意すべき点である。

2. 民族に関する記述の特徴

「概説」の「第五課. 中華民族の起源」「第六課. 中華民族の形成」において「中華民族」について論じている。「中華民族の起源」を考古学上の成果に基づき、「疑い無く中国本土であり、最も早い発源地は即ち黄河流域」であるとする。最大の根拠は1922・23年ごろから始まる北京原人の発掘であり、「学者の研究の結果」と断りながら、北京原人を「現在の中国北部の人と極めて相い似て」いるとする。そしてその他の考古学の新発見によりつつ、五万年前には、オルドス、長城附近にあって、人類は繁栄しており、五千年前には農業文化の階段に入っていたとし、黄河の沖積平野である中原は農耕に適しており、「中華民族の発祥地」であるとする。

本書は「中華民族」について、

中華民族はもともと多数の宗族の融合して成るものであり、中華民族に融合する宗族は、歴代みな増加している。

と述べ、「民族」の語を避けて「宗族」という語を用いているが、実際には多様な民族を融合しつつ拡大するものと位置付けている。そして中華民族の形成過程を四期に分けて説明する。概観すると以下のようである。

〔中華民族大融合の第一期〕(秦以前)：

黄帝時に黄河下流の統一を果たして国家を建設し、これをもって「中華民族立国の始」とする。中華民族の勢力の拡大にともない、新しい分子が中華民族に加わることとなる。最初に加わったのが苗人であり「三代以前にあって、すでに中華民族と一種を混成した」とする。こうして次々と周辺の諸民族と接触し「血統と文化もまたしだ

いに融合した」とし、秦の統一にともない、新しく加入した分子は、遂に融合して一体となったとする。

【中華民族大融合の第二期】（漢～南北朝）：

匈奴に始まり烏桓・鮮卑、氐・羌等の諸族は漢と戦争を発生したが、「中国に雑居するによりて漸次同化」したとし、政治上の統一はなかったが、血統と文化において混合して、「少なからざる新しい血液を吸収」し、隋・唐の強盛を築いたとする。

【中華民族大融合の第三期】（隋～元）：

唐と関係した突厥・回紇等は、戦争によって同化したとし、遼・金は中原に入って「完全に同化した」とする。元についても「血統の混合、文化の交流は、自ら必然の結果を為し」たとする。

【中華民族大融合の第四期】（明～民国）：

明については西南の關係に触れる程度である。対して清については「漢・満・蒙・回・蔵・苗を合せて一家と為し、後来の五族共和の先声を開く」と評価する。民国になると、諸民族を「平等に結合」し、一層の融和に努めているとし、「甚だしきは血統上にあってもみな漸漸融合して一つの統一体となるに至った」と結んでいる。

以上の「中華民族大融合」の歴史とは、「血統」と「文化」の融合を理想とするものであり、その際に漢族の文化を核とする。

3. 各時期の叙述の特徴

「概説」では「第一課 中国歴代興衰の大要」「第二課 中国歴代文化演進の趨向」「第三課 中国歴代疆域の沿革」「第四課 中国歴代政治区域の変遷」に分けて通史的に概観している。ここでは、第一課と第二課を中心に本書の叙述の特徴を検討しよう。

【政治史叙述の特徴】

本書は「伝統の歴史観念」を基本方針としており、「第一課」の「中国歴代の興衰の大要」では「從部落到国家／唐虞夏商周的政局／秦漢国力的強盛／從三国到隋唐／宋元明清的政局」の5部に分けている。しかしこの分類は便宜的なもので、基本的に王朝興亡史として描いている。各時代ごとにまとめると大凡以下のようなになる。

【部落より国家へ】

冒頭に「中華民族は世界で最も早い民族の一つである。中国は世界最古の国家の一つである」とし、本書を「中華民族」の歴史として、王朝の興亡を柱に述べるとする。中華民族は黄河流域に聚居し、黄帝によって「完備した国家」となったとする。

【唐虞夏商周の政局】

唐尧以下「みな英明な君主」であったとし、古聖帝賛美の趣がある。この時期に「中華民族の立国の根基」が定まり、周になって「完備した国家」となったとする。

【秦漢国力の強制】

秦は「統一の大帝国」を建設し、西漢となり、武帝の時に對外的に躍進し、「大漢の

声威は、東亜を震動せしめた」とする。新をへて東漢になると、班超・甘英によって「漢家の声威は、更に遠く地中海の浜に達した」とする。

【三国より隋唐へ】

魏晉南北朝の概要を述べ、隋唐を「民族の活力の復た盛ん」な時代とする。唐の太宗・高宗時代について、「四方の異族は都心より誠服を悦び、甚しきは波斯・大食・日本等国に至りてはみな使を遣して好を通ず」とする。

【宋元明清の政局】

宋・遼・金の割拠を略述し、元については、戦闘力の強いことと欧・亜両洲に跨る大帝國を建設したことを述べるとともに、「中西文化は因りて極めて密切な關係を生じた」として、文化交流上の意義に論及している。明については、鄭和の南海遠征とそれともなう中華民族の南洋への移住に論及する。清については「外蒙古・新疆・青海・西藏はみな重ねて版図に入り、中国の最も完備した疆域が完成した」とする。そしてアヘン戦争以後、立ち上がれない状況となり、国父の主唱する「国民革命」によって清を倒して民国を樹立し、「中華民族はやっと自由平等の新時代に入」ったとする。

【文化史叙述の特徴】

ついで文化に関する叙述の特徴を概観しよう。「第二課」の「中国歴代文化演進の趨向」は「中国文化的発端／周代文化的興盛／秦漢的統一文化／魏晉南北朝隋唐的文化／五代与兩宋的文化／元明清的文化／中国文化的趨向」の8部に分けている。第一課の政治史と区分の異なるのは区分自体が便宜的な性格を有すためである。各時代ごとにまとめると大凡以下ようになる。

【中国文化の発端】

黄帝を「中国文化の鼻祖」と位置付けている。

【周代の興隆】

周について「制度典章」の整備ならびに「尊親・敬祖の觀念を著し、礼を制し樂を作り、我が国の民族精神を確立した」とし、中国の「民族精神」が儒教の理想と一致するものであるを示している。そして諸子百家の中で孔子の「修身・齐家・治国・平天下」の語を掲げ、「我が国二千多年来の倫理思想であり、また二千多年来の立国精神である」とする。

【秦漢の統一文化】

秦の諸制度の統一を述べる。ただし焚書坑儒には論及していない。前漢の武帝の儒教政策を掲げて、「国民思想はこれより一致に帰す」とする。

【魏晉南北朝隋唐の文化】

士大夫の風気が、放逸にむかい、老・莊思想の盛極となるなかで、対外交通の発達にともない域外の影響を受け、唐代にはインドとペルシアの影響を受けて、美術は「空前の壯觀を呈した」とする。

〔五代兩宋の文化〕

五代の印刷術を、「世界文化に伝播の利器」を与えたと評し、宋代の理学を儒・道・仏を融合し、「中国・印度思想を集めて大成した」とする。

〔元明清の文化〕

「中西文化の交琉」をこの時期の重要な貢献とする。「我が国の四大発明」、すなわち紙は唐代に、火薬・羅針盤・活字印刷は元代に、それぞれ伝播し、「近世歐洲文明の序幕を切り開いた」。そして「西方の科学知識もまた漸く中国に輸入された」とし、明末を盛時とする。清の学術については「実践精神」に基づく点を評価し、アヘン戦争後の外圧による維新運動に論及し、ただし「西洋文明の皮毛を摂取」したに過ぎないとする。そして

国父中山先生は実際の体験の結果を経て、中国固有の精神を根拠とし、同時に西洋文明の精英を吸収して、三民主義の文化を創造した。

と述べ、中国固有の精神と西洋文明の精華を吸収することによる「三民主義の文化」のあり方を称揚する。



以上、本書は伝統的な王朝興亡を柱としつつ、中国・中華民族の拡大ならびに中国の対外的発展を描こうとしている。本書は「中華民族大融合」の歴史として、血統・文化の融合を理想とする。そして漢族西來說を否定し、中国固有説の立場に立ち、儒教の伝統文化を称揚し、漢族の民族アイデンティティを根幹とする。一方で外国との交流による文化の影響にも留意し、三民主義の精神に則って、固有の精神と西洋文明との調和を主張する。

Ⅳ. 分析枠組みよりみる変化

以上の歴史教科書総論部の分析によりつつ、筆者の設定する4つの分析枠組みによって、民国期のナショナル・アイデンティティの志向を整理しよう。なお論述の便宜より、趙玉森編書を民国初期〔Ⅰ期〕、顧頡剛・王鍾麒編書を壬戌学制後〔Ⅱ期〕、国立編訳館編書を民国末〔Ⅲ期〕と略して述べることにする。

【①世界に対する認識】

〔Ⅰ期〕では、「同心円構造」に基づく国史体書として編纂され、西洋史・東洋史との接合に配慮し、「アダムの子孫」と「炎黃の胄裔」とを対置しており、「中国史」を西洋史に対置しようとする意識の萌芽を認めることができる。〔Ⅱ期〕になると、世界主義（コスモポリタニズム）に基づく「課程綱要」を背景として、西洋史を主とする

世界史と対をなす国史体書として編纂されている。したがって時代を問わず国外の關係に留意することとし、特に現代を「中国文明の世界化の時代」として捉える。〔Ⅲ期〕になると、多難な状況を背景として、民族主義と愛国心の鼓吹とを課題として、伝統的觀念に基礎を置く国史体書として編纂され、世界については中国の影響の大きなことを強調している。

【②漢族の淵源に対する認識】

〔Ⅰ期〕では、清末以来の漢族西來說による。したがって苗族を「中土の土人」とする。〔Ⅱ期〕になると、漢族西來說に対する疑念を表明し、苗族について蔵・苗「同山一源」説のあることを紹介する。〔Ⅲ期〕になると、考古学の成果を基に、漢族中国固有説を主張する。その結果、苗族を漢族に最初に加わった民族と位置付ける。

【③文化に対する認識】

〔Ⅰ期〕では、民族興亡史觀により、民族融合の過程で、多様な文化を取り入れたことを評価する。〔Ⅱ期〕になると、「世界史」との関連を視野に置きつつ、他地域との交流を重視している。その際に、華族は異民族の征服を受けながらも征服者を同化する文化の力を有しているとし、異民族との交流の効能を精神的吸血による「保養の効」として説明する。〔Ⅲ期〕になると、中国の民族精神を儒教の精神から導き出しており、三民主義による固有精神と西洋文化との融合を標榜する。

【④「中華民族」ならびに漢族と非漢族の關係に対する認識】

〔Ⅰ期〕では、五族共和論を基礎に民族の融合を説く。「中国人種」の語を用いて、漢・モンゴル・ツングース・トルコ・チベット・苗の六民族を構成民族とする。現代においては「精神上の連合」をへて最終的に一つの大民族となることを目指している。

〔Ⅱ期〕になると、先の六民族に韓族を加え、七民族を構成民族とする。また漢族の語を用いず華族の語を用いて、同化した多民族を包含する概念とする。〔Ⅲ期〕になると、民族主義と愛国心を標榜して、中華民族大融合の歴史として描き、民国の諸民族平等の論理を評価するが、文化とともに血統の融合にも言及し、漢文化を中心に据えて、漢族中心の志向が顕著となる。

おわりに

民国期のナショナル・アイデンティティの方向性を考えると、〔Ⅱ期〕における世界主義（コスモポリタニズム）の潮流と対峙する中から特色ある展開をしたように思われる。西洋史を核とする世界史と対をなす中国史とは、国史体でありながら、世界史的性格を有することとなる。漢族とは何か、漢族と他の諸民族との關係はどのようなであり、どのようにあるべきか、それらを包含する中華民族とはなにか等々。そうした中から漢族西來說への疑念を生じ、征服者を同化する文化の力に確信を持ち、多民族を包含するより一層の工夫を試みることとなる。〔Ⅲ期〕には、多難な状況を背景として愛国心の鼓吹を図り、偏狭な論立ても見られる。しかしより鮮明にナショナル・アイデンティティの方向性を確認することができる。漢族の中国固有説を断言し、儒教文

化へと回帰し、血統の融合にまで踏み込んでいる。こうした論調は漢族ナショナリズムを優先したもので、漢族に受け入れやすいものということになろう。

拙論は三冊の教科書の総論部分を手がかりとしてもので、きわめて断片的な考察である。しかしナショナル・アイデンティティの方向性を一定程度探ることができたと考える。より広範な教科書の検討、教科書本文の叙述内容の分析等はこれからの課題である。